

「キリストのおもてなし」  
ヨハネによる福音書 21 章 1-14 節

今日の箇所には、「イエスが死者の中から復活した後、弟子たちに現れたのは、これでもう三度目である」(14 節)とあります。イエスさまは、一度私たちと出会ったら、後はもう知らないというようなお方ではありません。私たちのために何度でも、私たちのもとを訪れ、私たちと出会い、励まし慰め強めてくださる。より深い信頼へと招いてくださる。それがイエスさまの私たちへの関わりです。

弟子たちは、復活されたイエスさまと既に二度出会っていました。一度目はイースターの日の夕方、二度目はその一週間後、トマスのためにイエスさまはもう一度現れてくださいました。そして弟子たちは、宣教の働きへと送り出されたのです。しかし、その後の彼らは、ガリラヤの故郷に帰って漁師としての生活をしていました。

かつて漁師だった彼らは、漁の網を捨てて、主イエスの弟子になって人間をとる漁師になりました。そして、復活の主に出会って聖霊を受け、使徒として派遣されました。ところが、その弟子たちがまたガリラヤで漁師に戻ってしまっているのです。この時の弟子たちに挫折感がないはずがありません。そんな弟子たちをイエスさまは決して見捨てない、諦めないのです。そして、彼らに語りかけ、ご自分の姿を現し、関わりを持たれるのです。

漁をしていた弟子たちは、その夜、魚が一匹も獲れませんでした。その弟子たちの姿をイエスさまは岸辺に立って、ずっと見ておられました。しかも、ただ見ていただけではありません。9 節には、その弟子たちのためにイエスさまがパンと魚を焼いてくださっていたことが記されています。

しかし、弟子たちはそのことをまったく知らないのです。いいえ、弟子たちだけではなく、私たちもそうです。私たちも、この時の弟子たちと同じように、何をやっても成果が上がらない、そういう徒労感を味わうこともあるかと思えます。なぜイエスさまは事を起こしてくださらないのか、そう呟くこともあるでしょう。しかし、復活のイエスさまは、私たちが世の空しさの中に埋もれてしまっているような時にも、なお私たちの側にいてくださり、恵みの食卓を備えていてくださるのです。だけど、私たちはその事に気づいていないのです。そんな私たちに対してイエスさまは、ご自分の方から声をかけてくださるのです。

弟子たちが舟から陸に上がると、そこには朝食の用意がされていました。そしてイエスさまは、「さあ、来て、朝の食事をしなさい」(12 節)と言われます。弟子たちが作ったものではありません。岸に上がったら、すでに朝食が用意されていて、イエスさま自らがそれを取り分けて弟子たちに与えてくださったのです。復活の主イエスが、毎日の生活に欠かせない朝ごはんを一緒に食べてくださる。つまり、これから始まる新しい一日に、あなたの生活の中に「私は共にいる」ことを示してくださったのです。それによって弟子たちは平安を与えられました。彼らは、敢えてイエスさまへの言葉を口にする事なく、静かに、しかし心底満たされていることに深く頷きながら、イエスさまからもらった魚の味を噛み締めたと思うのです。

復活された主イエス・キリストは、どんな日にも、どんなに落ち込んで迎える朝にも、「おはよう。さあ朝ごはんだよ」と言って、一緒に新しい一日を始めてくださいます。明日起こることさえ私たちには見えません。けれども、この確信があるからこそ、私たちは平安に朝を迎えられるのです。将来の道が保証されているとか、老後の身の安全や安定が保証されているとか、そういうことが私たちの希望なのではないと思います。復活した主イエス・キリストが、私たちの日々の生活の只中に生きておられること。この方が、今日も、今週も、私と一緒に歩んでくださること。それが私たちの希望なのではないでしょうか。